

別荘地の「庭およびガーデニング」が 居住環境に与える効果に関する研究

— 軽井沢町 S 別荘地の場合 —

竹田喜美子・大澤直子

The Effects of a Garden and Gardening on a Villa Site's Living Environment
—The Case of S Villa Site, Karuizawa—

Kimiko TAKEDA and Naoko OSAWA

This case study examined the effect of a garden and gardening on the living environment in S Villa Site, Karuizawa. The authors stayed at the site for a week in September, 2009, visited 43 households, recorded the floor and garden plans of each house and interviewed 83 dwellers. The results analyzed are as follows:

- 1) The rich and ample gardens of each house allow fully open exteriors, and this makes dwellers feel that their gardens are public rather than private. The dwellers feel free to communicate with each other, and this makes it easy for them to contribute to making more beautiful landscapes.
- 2) The interior of their houses extends out into terraces and gardens, while exteriors are reflected on and visible through large picture windows. The distinction between the inside and the outside is minimized and this merger creates a more relaxed atmosphere. The garden is a landscape and is also part of their living space.
- 3) Amid gardeners in the area are apt to enrich their front and side gardens, and those who own smaller gardens work to make the best of what they have, because they delight in having their gardens admired. They use various fancy garden items to enhance their green spaces. The quality of the living environment, via gardens and the personal endeavor that goes into creating them, is uplifted. The garden is the key to making this uplift possible.
- 4) Gardening triggers positive communication among neighbors, husbands and wives. In other words, the common hobby strengthens the ties of friendship, and also ties between couples who help each other.

The authors conclude that gardens and gardening have positive effects on the dwellers bringing about much favorable intercourse and thus enhance the quality of the living environment.

Key words: villa site (別荘地), living environment (居住環境), landscape (景観), terrace (テラス), picture window (ピクチャーウインドー), garden and gardening (庭とガーデニング), front garden (前庭), side garden (側庭), communication (交流)

1. はじめに

1) 研究目的

日本でのいわゆるガーデニングブームは1990年代に始まった。97年の流行語大賞を受賞してから、「ガーデニング」という言葉は、広く世間に知られることとなった。そのブームの火つけ役はイギリス流の風景式庭園を模倣し、

自然のありのままの姿を庭に表現するイングリッシュガーデンである。ブームを齎した大きな要因と考えられるのは、これが従来の日本庭園の様式を模倣した庭とはイメージを異にするものであり、何より形式が自由で、素人、玄人に関わらず、誰でも手軽に庭づくりが楽しめることであった。ブームは去ったかに見えるが、環境保全が叫ばれている現代社会において、緑に癒しを求め、自然回帰を渴望する人々

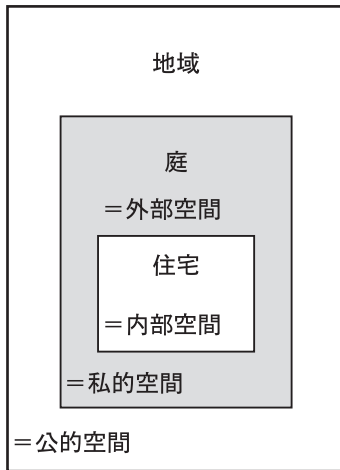


図1 居住環境の空間構成

が増え、庭づくりへの関心はいっそう高まっている。

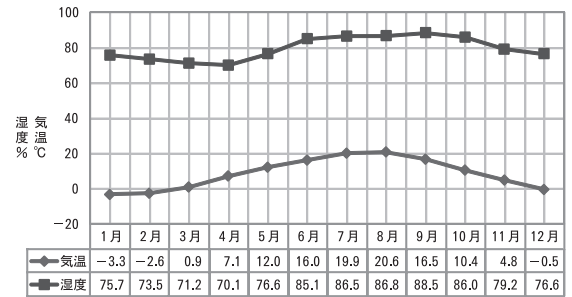
本研究の目的は、「庭およびガーデニング」が、居住を核に地域と住宅との関係で形成される居住環境に与える効果を、多角的な視点(後述)から考察することである。

庭と居住環境の関係を図1に示す。居住環境は、公的空間である地域と、私的空間である住居から構成される。そして、住居は内部空間である住宅と外部空間である庭に分類できる。庭は私的空間に属するが、地域と住宅の中間に位置する。居住環境の質は、住宅の規模や設備、間取りなどととも、敷地や庭の広さ、造園、さらに敷地を取り囲む外部の自然環境とのバランスなどにより定まる。居住環境の質を向上させるためには、公的空間と私的空間に挟まれた庭の果たす役割は大きいと思われる。

2) 研究方法

本研究が対象とするのは、自然環境に恵まれた別荘地に定住する主としてシニア層である。シニア層は、自由時間が潤沢にあり、一日の大半を趣味に費やすことができる。その場合、趣味は単なる道楽ではなく、生活の大きな部分を占め、それがそのまま生きる喜び、楽しみ、生きがいとなる。ガーデニングという趣味がそのような位置付けになった時に造り出される庭からは、街並み景観の向上、ライフスタイルの変化など、様々な効果が期待できる。さらに、別荘地の居住者は富裕層が中心であるため、時間、経済面での制約が少ない。このような恵まれた階層の中にこそ、現代の人々が本当に求めている居住環境の典型が、如実に表れているのではないかと筆者らは推測した。

本研究は、ガーデニングによって造り出された庭を、庭と街並みとの関係、庭と住宅との関係、庭の景観、庭と人との関係の4軸で分析し、庭面積、庭配置タイプ別に検討することで、「庭およびガーデニング」の効果を解明しよ



気象庁 気象統計情報より作成

図2 軽井沢町の気温と湿度

うとするものである。

3) 調査概要

①調査地 長野県軽井沢町S別荘地が調査地である。軽井沢町は雄大な浅間山を背景に、緑豊かな自然に恵まれた標高1,000メートル近い高原にあり、明治時代に避暑地として国内外に紹介されたことを契機に、国際保健休養地として歴史と文化を築き上げてきた。2008年現在、総人口18,011人、世帯数は7,435戸であり、その数は年々増加傾向にある。また新幹線の開通により、都心へのアクセスも1時間と交通の便も良く、非常に恵まれた立地環境である。軽井沢の気候について、気温は12月から2月の間は氷点下を下回り、時には氷点下15度まで下がることもある(図2)。9月の平均相対湿度は92%と、東京に比べ23%も上回っており、冬場の湿度は、東京の夏の湿度とほぼ同じ数値である。年間の降雪量は、例年100cmを超える場合が多い。冷涼・湿潤気候であるため、育つ植物の種類に制約を受ける。

②調査対象と方法 調査対象は、長野県軽井沢町S別荘地を中心に定住する43世帯である。

調査方法は、ヒアリング調査を中心に、住宅の間取りと、敷地の植栽配置図を採取し、写真撮影を行った。調査内容は、ガーデニングの有無・頻度・行為者・ガーデニング歴・動機/ガーデニングの長所・短所・評価/ガーデニングへのこだわり・庭の装置と場所/プライバシー意識と防犯意識/ガーデニングを通したつきあいの有無・程度/庭での行為・評価等である。

調査期間は平成21年9月7日(月)~13日(日)である。

③居住者の属性 調査対象は、43世帯で83名(男性41名、女性42名。内、1世帯はアンケート調査のみ。)である。年齢構成は50歳代から70歳代で、65~69歳が男女とも4割弱である。平均年齢は、男性61.8歳、女性58.6歳である。家族構成は、夫婦のみが32世帯、単身が3世帯、夫婦+子が8世帯である。職業構成は、無職が夫で6割、妻で8割、有職では夫が常勤、妻はパートが過半を占める。

④庭の空間的特性 調査地の大きな特徴は、一戸あたりの敷地面積が大きく、敷地内は自然の高木で覆われている点である。敷地面積は264.0～3,300.0 m²で平均は948.8 m²、建築面積は51.7～257.4 m²で平均は104.6 m²、庭面積は214.0～3172.2 m²で平均は845.0 m²である。平成20年度の総務省住宅土地統計調査によると、日本の住宅の平均的な庭面積(=敷地面積-建築面積)は約180 m²であるから、調査地の庭が並外れて広大であることは明らかである。

対象の庭は面積別、庭配置タイプ別に、次のように分類できる。庭面積の分類は200 m²以上500 m²未満、500 m²以上1,000 m²未満、1,000 m²以上とし、それぞれの戸数は17戸、16戸、10戸である(図3)。なお、1,000 m²以上のうち、9戸は庭面積の半分が傾斜地である。

庭配置タイプは、前庭、後庭、側庭に分ける(図4)。前庭とは、主庭が前面道路に面しており、後庭とは、主庭が前面道路とは面しておらず、それとは反対に住宅を挟んで位置している。側庭とは、主庭と住宅の両方が前面道路に面している。それぞれの戸数は12戸、14戸、16戸(不明1戸)であり、側庭の場合、16戸のうち11戸が、敷地に

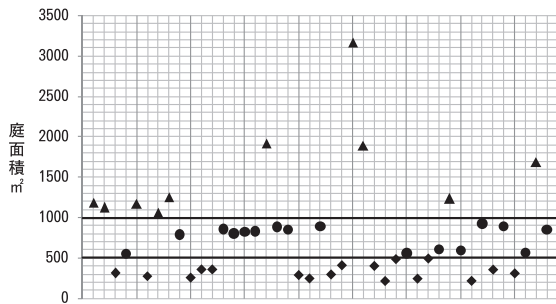


図3 庭面積の分布

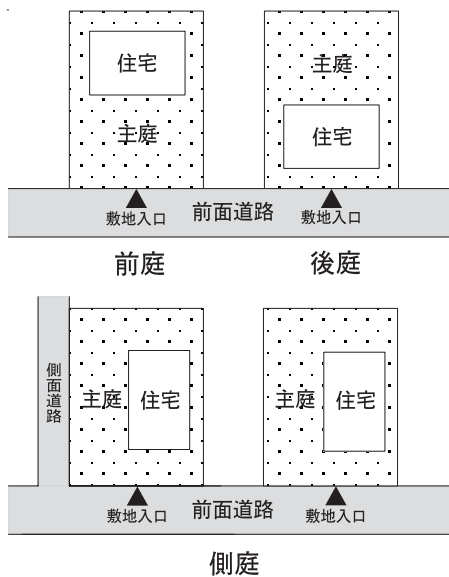


図4 庭配置のタイプ

対して2面の道路が接する。また、主庭とは、主屋全面に設けられた庭のことであり、敷地に占める割合が一番多い部分の庭のことを指す。前面道路とは、敷地に2メートル以上接する道路のことであり、2つ以上ある場合は、敷地入口のある道路を前面道路として扱う。

隣地との境界は、建築協定により塀や壁を設けてはならないという制約があるため、部分的に木杭で仕切る、あるいは自然の高木で分けるなどしており、敷地の境界は一見曖昧である。

2. 庭と街並みとの関係

自然林の高木に囲まれた広大な敷地の道路側には、境界を明示する門や塀がなく開放的な街並みが続く。このような街並みに対する居住者のプライバシーや防犯に対する意識や対策を把握し、庭と街並みとの関係を探る。

「庭において通行人や近所の人の視線(プライバシー)は気になるか」の質問では、「気にならない」が65%、「気になる」が28%である。その対策(複数回答)は「植木や草花を植えて目隠し」が圧倒的である(図5, 図6)。

次に、「防犯面について不安はあるか」との質問では、「なし」が51%、「あり」が42%である。「不安なし」が5割を占めるのは、周囲の豊かな自然を防犯の役割として認識していることを示す。その対策についての回答(複数回答)は、「目隠しせずオープン」の38.9%と、「センサーの取り付け」の27.8%が各々、3割前後という結果である(図7, 図8)。

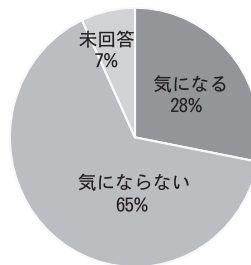


図5 プライバシー意識

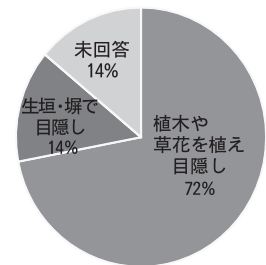


図6 プライバシー対策

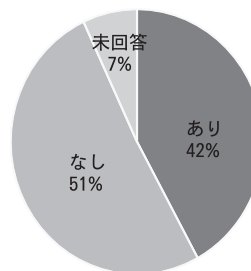


図7 防犯意識

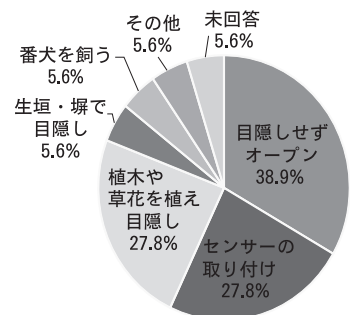


図8 防犯対策

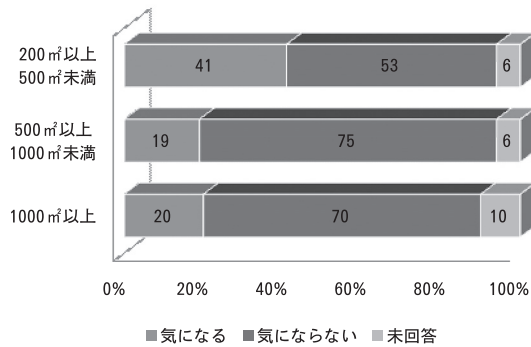


図9 庭面積別プライバシー意識

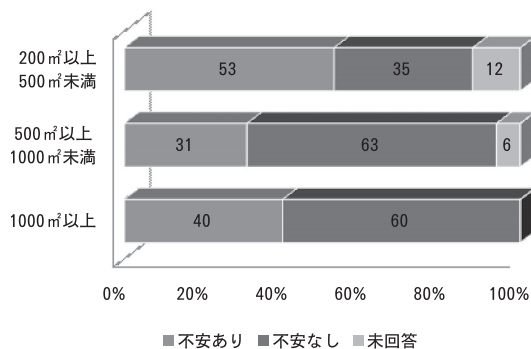


図10 庭面積別防犯意識

1) 庭面積別に見る庭と街並み

庭面積別にプライバシー意識を見ると、以下の結果になる(図9)。庭面積が小さい場合が、一番「気になる」ことから、庭を公的空間というより私的空間として認識していると言える。また、その対策について「植木や草花を植えて目隠し」がほとんどであるが、庭面積が小さい場合は、「生垣・塀・フェンスなどで住宅を取り囲む」の回答も見られる。

次に、庭面積別に防犯意識を見ると(図10)、プライバシー意識に比べ、全体に不安は大きくなっている。庭面積が一番小さい場合、特に大きく、これはプライバシー意識と同様に、庭を私的空間として認識する傾向が強いためだと考えられる。その対策については、「目隠しせずオープンのまま」が、庭面積が小さい場合と、大きい場合とも約5割である。

2) 庭配置タイプ別に見る庭と街並み

庭配置タイプ別にプライバシー意識を見ると(図11)、タイプ別に顕著な差がある。前庭の場合、圧倒的に「気にならない」が多い。これは、主庭が外部に対してオープンであることから、庭を公的空間として認識している結果であろう。その対策について、側庭の場合のみ「生垣・塀・フェンスで住宅を取り囲む」との回答があることから、他者の視線を遮ろうとする心理が大きく働いていると言える。

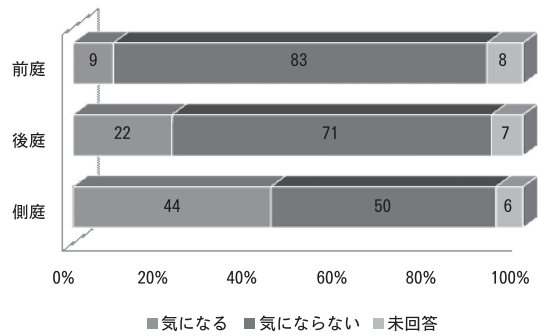


図11 庭配置タイプ別プライバシー意識

なお、側庭の場合「気になる」の回答のうち85%が、2面の道路に接する敷地形態である。

庭配置タイプ別に防犯意識を見ると(図12)、プライバシー意識とは違い、タイプ別にそれほど大きな差が見られない。その対策について、一番多く挙げられた回答は、前庭の場合、「目隠しせずオープンのまま」が5割で、周囲の視線を、防犯対策のひとつとして捉えている。側庭の場合、「センサーを取り付け」が4割強である。なお、側庭で「不安あり」と回答した中の7割が、2面の道路に接する敷地形態である。

開放的な街並みでは、〈見る一見られる〉関係が生じ、視線の交流が密になり、プライバシー保護や防犯に効果を上げている。私的空間である庭は、見られることによって共有意識が高まり、半公的空間になっている。「ガーデニングを始めた動機」についての回答も図13に示すように、

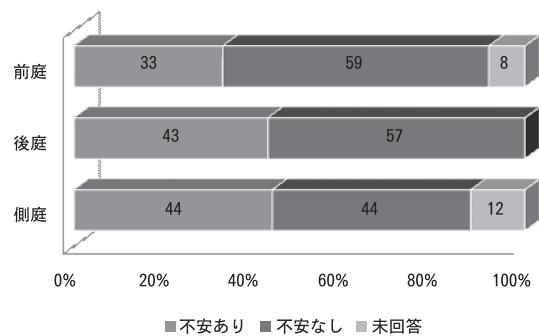


図12 庭配置タイプ別防犯意識

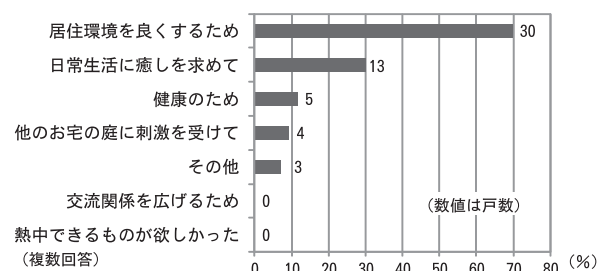


図13 ガーデニングの動機

「居住環境を良くするため」が7割, 「日常生活に癒しを求めて」が3割である。庭のありようが居住環境を左右することを認識していることがわかる。

3. 庭と住宅との関係

庭と住宅は不即不離の関係にある。庭は、住宅があって初めて存在するものであり、逆に庭は、住宅を形づくる要素でもある。室内からテラスへ、そして庭へと段階的に庭と住宅との関係を探る。

1) 室内から見た庭

①リビングルーム（以下リビングと略す）からの眺望

全体として開放的な間取りが多いが、その中でもリビングからの眺めが印象的であったA宅の事例を挙げる（図14、写真1）。庭の全景をリビングから眺めることができ、非常に開放的な空間となっている。リビングを2壁面にわたって広い開口部にし、庭に面する壁面の64%が開口部である。窓は庭の風景を映し込むピクチャーウィンドーで、室内に季節感を演出している。

また、床面積に対するLDK面積の割合は全体で15.4~65.2%で、平均は31.9%である。A宅の場合、リビングが床面積の4割を占め、広々としたリビングと庭とが一体となった景観を望むことができる。リビングに置かれている家具に注目すると、両サイドの窓を意識して、テーブル、ソファ、イスが配置されている。リビングの使われ方自体も、庭に大きく左右されるのではないだろうか。

A宅の庭は、主に妻によって手入れされている。ガーデニングが趣味であり、ほぼ毎日、多い時では3~4時間、庭に出て作業するという。丹精込めて造り上げた庭を、室内から眺めるのが大きな楽しみで、アームチェア・ガーデニング、すなわち「次は何を植えようか」と、イスに腰掛けて思案するそうだ。室内から見る庭の景色を生活の中に取り込むことにより、愉しみが増大している。

②各部屋からの眺望

リビングの他に、室内からの庭の眺めを楽しむことができる例として、バスルームと和室が挙げられる（写真2, 3, 4）。周囲を豊かな自然に囲まれ、庭面積が広大であるため、プライバシー対策が特に重要であるバスルームに関しても、比較的開口部を多くとることができる。緑が持つ癒しの相乗効果で、疲労回復は充分達成されるだろう。

また、B宅の和室（写真3）は、妻が趣味の習字を行う部屋である。集中したい時や、リラックスしたい時などに、窓から景色を眺めることで心の落ち着きを得ている。自然が齎す様々なプラスの影響を享受している。

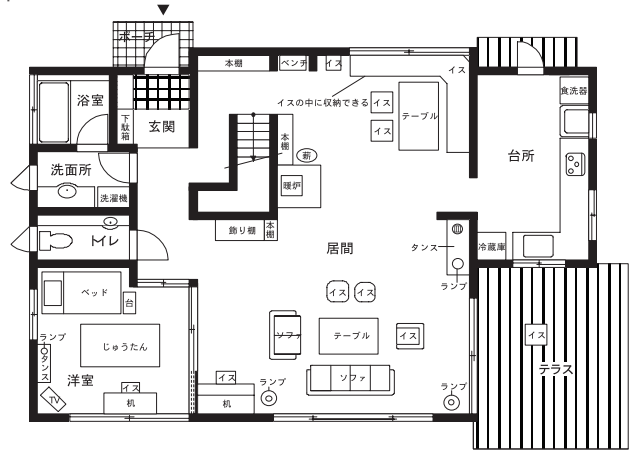


図14 A宅 平面図



写真1 A宅 内観



写真2 バスルーム

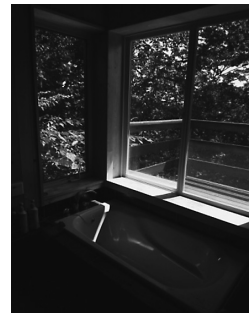


写真3 B宅 和室



写真4 和室

2) テラスの活用

テラスとは、建物の1階に接して取り付けられ、屋根がない構造である。建物の一部であり、庭の一部でもあり、テラスは、建物と庭とを繋ぐ第一次接点になる。本稿では、住宅に接して取り付けられている場合、地面に接している

いないに関わらず、サンデッキや、ウッドデッキについてもテラスとして扱う。

①テラスの有無と規模 対象となる43戸のうち96%が、住宅に接する形でテラスを設けている。テラス面積は5~40㎡で、平均は19.1㎡である。5㎡以上15㎡未満と、15㎡以上25㎡未満のテラスが4割前後、25㎡以上40㎡未満が2割である。

②テラスの囲いと形態 テラス周りの囲いの有無は、「あり」が8割弱、「なし」が2割強である。安全面での考慮から、大きめの格子状の囲いを設けている割合が高い(写真5)。テラスの形態は、8割が日常生活の拠点となる「リビング」を中心に、庭に接する住宅の全面にテラスを取り付けており(図15)、テラスが住宅と庭との関わりを強めている。住宅内の部屋どうしがテラスを介して繋がるとも考えられ、テラスの存在により、各部屋の使い方の可能性が大きく広がっている。

③テラスに置かれるものと利用状況 一番多く見られるものは「テーブル・イス」で80%、続いて「植木」の43%である。その他に「装飾品」、「収納庫」、「バーベキューセット」などが挙げられ、室内と同じような感覚でテラスに設置されている。約7割がテラスを利用しており、「天気の良い日に庭を眺めながら朝食をとる」、「お茶や読書をしてくつろぐ」、「親しい友人達を招いてバーベキューパーティーをする」、「ホームパーティーを開く」などである。リビングを中心とした生活空間の延長としての利用は、まさしく「アウトドアリビング」である。種々のパーティーなどのやや非日常的行為も含め、テラスは多様な目的で使用されている。なお、テラス面積が大きいほど利用率は高い。

3) 庭にある生活スペース

住宅に接して設けられているテラスとは別に、庭にテーブルやイスを置くことで、生活空間を創り出し、そこで自然に囲まれながら、お茶や読書を楽しんでいる例が、全体の26.5%になる。また、広大な庭に、宿泊のためのゲストハウスや趣味のためのアトリエを設けることもある。例としてC宅を参考に挙げる(図16、写真6、7)。C宅の妻の趣味は陶芸であり、庭の一角にアトリエを建てている。C宅のアトリエは、周囲が豊かな自然に囲まれており、集中するには最適の環境である。「特別な空間である」という意識が、創作活動に刺激を与えると推測できる。

住宅で行われる生活の一部が、内部空間の室内から外部空間のテラスや庭に表出することから、庭は住宅と同じ生活空間であることが認識され、一方、室内にいと庭の景色が目飛び込み、庭と住宅の一体感が強まる。外部空間



写真5 テラス風景

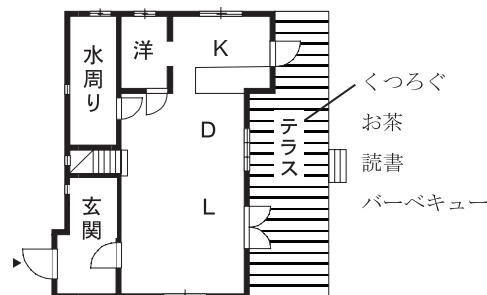


図15 一体型テラス (25.5㎡)

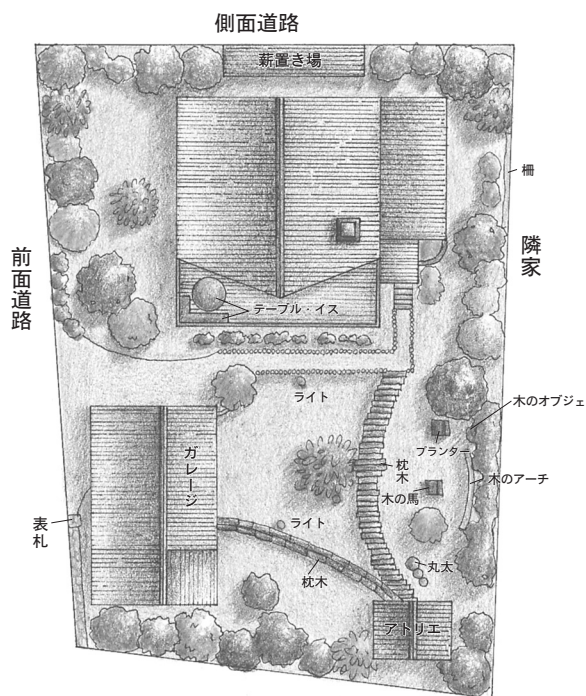


図16 C宅 配置図



写真6 ゲストハウス



写真7 C宅 アトリエ

と内部空間の連動により、居住者を和ませる生活環境が形成される。

4. 庭の景観

庭を構成する要素を取り上げ、その組み合わせから庭のデザインを分類し、庭の景観を探る。自然との交歓を促進する庭の景観をどう演出するかを考えることが、実は庭造りの最大の愉しみであり、心を癒す源泉となっている。

1) 庭の構成要素

庭にある装置により庭の構成を見る(表1)。まず、「装置の有無」は、「あり」が72%、「なし」が19%である。装置の種類は、「植木・草花」、「芝生」、「園道」、「モニュメント」=ゲート・アーチ・パーゴラ、「ガーデンファニチャー」=テーブル・イス・ベンチ等、「ガーデンハウス」=アトリエ・ゲストハウス・納屋、「ガーデンアクセサリ」として「オーナメント」=置物等、「ポスト・表札」、「ライ

表1 庭の構成要素

構成要素		内容(装置)	戸数
花壇		植木・草花	27
芝生			20
園道		レンガ・タイル・敷石	20
モニュメント		ゲート・アーチ・パーゴラ	7
ガーデンファニチャー		テーブル・イス・ベンチ・バーベキュー炉	13
ガーデンハウス		アトリエ・ゲストハウス・納屋	16
ガーデンアクセサリ	オーナメント	置物・飾り	9
	ポスト・表札		14
	ライト		14



写真8 植木・草花



写真9 園道



写真10 パーゴラ



写真11 オーナメント

ト」が挙げられる(写真8, 9, 10, 11)。「植木・草花」が8割弱で最多,次に「芝生」と「園道」が6割弱,「ガーデンハウス」,「ポスト・表札」,「ライト」,「ガーデンファニチャー」が4割である。設置場所は,「道路に面した庭」,「道路に面さない庭」,「玄関前ポーチ」,「玄関までのアプローチ」,「門柱の周辺」が挙げられる。その中で「道路に面した庭」が上位で,「玄関までのアプローチ」と「玄関前ポーチ」が続く。

2) 庭面積別に見る庭の景観

庭面積別に庭にある装置の有無の質問結果から見ると(図17),大差はないが,庭面積が小さいほど装置の割合が高く,反対に庭面積が大きいほど,その割合が低い。

装置の種類については,どの規模においても「植木や草花」が最多で,次に「ポスト・表札」が挙げられる。設置場所については,どの規模にも共通して,「道路に面した庭」が上位で,庭面積200㎡以上500㎡未満では,次が「玄関前ポーチ」,「玄関までのアプローチ」で,玄関前に集中している。

3) 庭配置タイプ別に見る庭の景観

庭配置タイプ別に庭にある装置の有無の質問結果から見ると(図18),側庭と前庭が75%で装置率が高い。側庭は,道路に接する割合が3タイプの中で高く,通行人等の周囲

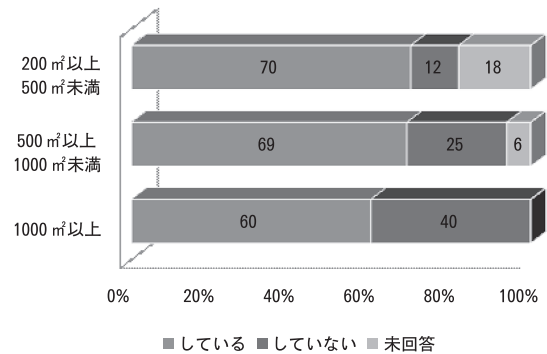


図17 庭面積別装置の有無

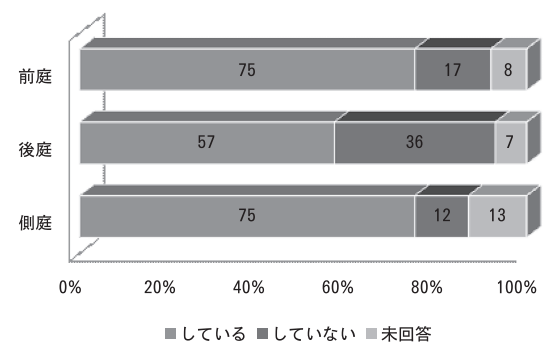


図18 庭配置タイプ別装置の有無

の目に触れる機会が多いので、おのずと装置に力が入るからであろう。前庭は、外部に対してオープンな庭形態であることが影響している。装置の種類については、全てのタイプにおいて、「植木や草花」が上位である。庭の景観やデザインを決定するのは、「植木や草花」などの植物が主体である。装置の数に注目すると、一番多いのは全体で44個の側庭タイプである。1戸につき平均3.7個の装置をしている計算になる。なお、全体の平均は2.9個である。設置場所については、どのタイプにも共通して「道路に面した庭」が上位である。前庭タイプの場合、「玄関までのアプローチ」が最多である。周囲の視線を意識していると考えられる。

4) 庭のデザインパターン

庭のデザインパターンを、庭の利用形態（眺望重視か活用重視か）、庭の装置形態、さらに手入れ具合などの情報をもとに、「自然オンリー」、「自然ハーモニー」、「自然と庭バランス」、「庭レイアウト」の4パターンに分類する。その結果を表2に示す。

①「自然オンリー」の庭：周囲の自然環境と庭の景観がほぼ同じような状態であり、庭には人の手が加えられていないという特徴がある。庭の利用形態は、眺望重視であり、周囲の自然と庭の景観が一体となって構成されている為、庭と街並みとの調和が生まれる（写真12）。

②「自然ハーモニー」の庭：周囲の豊かな自然を、個人の庭造りにも活かした庭を指す。ガーデニングにより、芝生が張られていたり、植木・草花、装置などが、少しではあるが存在している。また、4パターンの中で一番戸数が多いため、眺望重視の「自然オンリー」に近い形態、眺望・活用重視の「自然と庭のバランス」に近い形態がある（写真13）。

③「自然と庭バランス」の庭：周囲の豊かな自然を庭に取り込みつつ、ガーデニングによって、庭に様々な装置を施した庭を指す。ガーデニングを本格的な趣味として挙げた居住者の庭は、ほとんどがこのパターンである。ガーデニング意識が高いため、日常生活の場面で庭を活用する頻度も高い。庭の利用形態は、眺望・活用重視であり、街並みと庭との調和、庭と住宅との調和の、両方に効果を発揮する（写真14）。

④「庭レイアウト」の庭：比較的庭が狭く、他のパターンに比べると、周囲の自然が少ない。その代わりに、庭には多様な装置が施され、レイアウト重視の構成となっている。庭の利用形態は、活用重視であり、日本の一般的な住宅で行われているガーデニングに、一番近い形のパターンである（写真15）。

表2 庭のデザインパターン（重視度の高い順に◎○△×）

分類名	利用形態	自然環境	植木・草花	装置	手入れ	戸数(戸)	平均庭面積(m ²)
自然オンリー	眺望重視	◎	×	×	×	8	984.1
自然ハーモニー	眺望活用	◎	○	△	△	17	1014.9
自然と庭バランス	眺望活用	◎	◎	○	○	15	558.1
庭レイアウト	活用重視	△	◎	○	○	2	265.2



写真12 自然オンリーの庭



写真13 自然ハーモニーの庭



写真14 自然と庭バランスの庭



写真15 庭レイアウトの庭

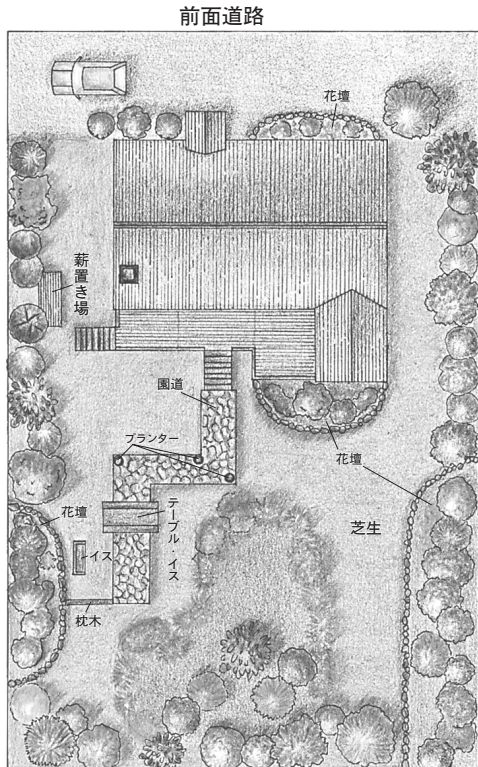


図19 D宅 配置図



写真16 D宅 庭

「自然と庭バランス」の庭として、D宅の例を挙げる(図19, 写真16)。庭面積は660㎡で、妻が時間をかけ、ほとんど単独で造りあげた庭である。テラスの階段から、石畳のアプローチが庭の中央へと続き、そこには、テラスの深緑と同じ色のベンチが置かれている。ここは、庭の景色を眺めるための特等席である。庭の中心にある花壇は、外側に向かうにつれ、背の高いものが植えられている。その他にも敷地の周りに3つの花壇を配し、どの方向から見ても、緑溢れる庭の景観が眺められるよう工夫がされている。周辺の高い木々はそのまま残し、自然と庭とをうまく融合させており、庭に装置を施すことで庭と住宅とのデザインの調和も生み出している。

自然木に囲まれた中に、季節ごとに植木や草花を、色や形、大きさの調和を図りながら配列した庭は、一幅の絵のように美しく、魂を解放させてくれる。庭は風景を創るための空間である。

5. 庭と人との関係

居住環境の質は、地域や住宅という空間だけでなく、それらに関わる近隣や家族という人間関係によっても左右される。ここではガーデニングすなわち、自宅の庭での花育活動を通して生じる近隣や家族との人間関係を探る。

1) ガーデニング状況

ガーデニングという趣味の位置づけは、夫の場合趣味の上位3位、妻に関しては上位2位である。ガーデニング歴の平均は10.5年で、中でも1~5年に集中している。定住年数の平均が6.1年であることから、移住を機にガーデニングを始めた割合が高い。また、「ガーデニングをする中で楽しいと思う時は」との質問で、「植木、草花が成長した時」が65%と多く、続いて「自然を肌で感じられる時」が53%である(図20)。ガーデニングの利点は、庭で植木や草花を育てることで、自然を身近に楽しむことができることである。

2) ガーデニングを通じた地域間の交流

ガーデニングを通じた交流があるのは、44%である。交流人数は1~10人までとなっており、その平均は3.7人で、複数の人と交流を持っている。交流の程度は、74%がガーデニングを通じて「お互いの家を行き来する」と答えており、「立ち話をする」は53%、「あいさつ程度」は21%である。ガーデニングを通じ、親密な交流が可能であることが明らかである。

また、交流がある場合の特徴として、次のような点が挙げられる。①定住年数の平均は4.7年であり、全体の平均より1.4年短い。定住間もない居住者にとって、ガーデニングが近隣関係や新しい交流関係を築く上で、大きな契機となっている。②ガーデニング頻度、費やす時間共に、全体よりも上回っており、庭に手間をかける割合が高い。③交流がない場合に比べ、庭に装置を施している割合が14%上回っており、庭への関心の高さが推察される。④交流がない場合に比べ、永住意識が18%上回っている。

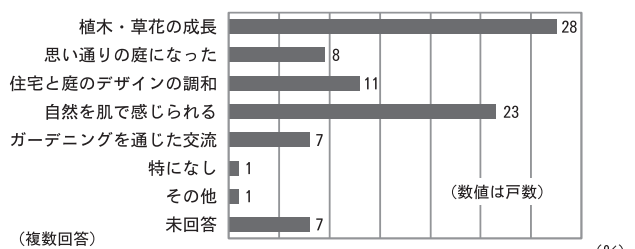


図20 ガーデニングを楽しんでいると思う時



写真17 E宅ブラックベリー



写真18 F宅 庭



写真19 夫の手づくりの小屋



写真20 夫が担当する芝刈り・薪割り

ガーデニングによって深まる交流が、永住意識を高める要因である。

ここで、ガーデニングを通じた交流についての事例を紹介する。まず、Eさん(妻)の例を挙げると、ガーデニング歴は5年で、6年前移住した際に、居住環境を良くするためと日常生活に癒しを求めてという理由から始めたという。週に1~2回、多い時で3~4時間は庭に出てガーデニングに勤しんでいる。庭は造り過ぎず、自然な感じにすることを心がけ、ハーブ、山野草、苔類を中心に植えている。その他にもヒメリンゴやイチゴ、ブラックベリーなども庭のあちこちに栽培している。ブラックベリーは「この土地の気候に合う植物だから」というアドバイスを受け、ガーデニング仲間から譲られたものである(写真17)。ガーデニングを通じて仲良くなった人が6人おり、お互いの家を行き来し、様々な情報を交換しながら庭造りを楽しんでいる。また、Fさん(妻)宅の夫婦合作の庭は、花壇、手押し車、ラティス、バラのアーチなど装置が豊かできれいに手入れがされていた(写真18)。庭で作業していると見ず知らずの通りがかりの人が「庭を見せて下さい」と声をかけてくることもある。ガーデニングを通じた交流も盛んで、深いつきあいの友人が何人もいるという。

3) ガーデニングを通じた夫婦間の交流

「ガーデニングをするのは主に誰」という質問には「夫」が19%、「妻」が30%、「夫・妻両方」が42%という結果である(図21)。このことから、ガーデニングを夫婦で楽しんでいる割合が高いことがわかる。

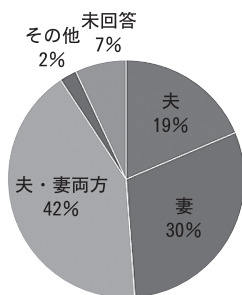


図21 ガーデニングをするのは主に誰か

調査時の印象として、植物を育てたり、庭のデザインを考えたり、主にガーデニングをしているのは妻である。しかし、庭で行う作業については夫婦間で役割分担をしているようである。夫の日曜大工によって作られた小屋やモニュメントが、フォーカルポイントとなり、庭を魅力的にしていることもある(写真19)。分担については、夫が芝刈り、薪割りを担当する場合が多く、庭で夫婦一緒に過ごす時間もかなりある(写真20)。

このように「植物を育てる」という作業を通じて、近隣との情報交換や夫婦協力が見られることから、ガーデニングが人と人を繋げるツールたり得ていることが実証される。

6. まとめ

別荘地の「庭およびガーデニング」が居住環境に与える効果をまとめると、以下ようになる。

- ①面積が広大で、外部に対して開放的な庭により、地域という公的空間と住宅という私的空間の中間領域が発生し、住宅と街並みが融和される。そのため居住者に共有意識が芽生え、居住環境の保全に積極的になる。
- ②住宅で行われる生活の一部が、室内からテラスや庭に表出する一方、庭の景色が窓に映り込み、庭と住宅が一体となる。庭という外部空間と、住宅という内部空間とが交錯することで、生活にゆとりが生まれる。庭は風景を創るための空間であると同時に、生活空間でもある。
- ③人目に触れる割合の高い前庭や側庭、小規模な庭などにおいては、他者からの〈見る一見られる〉の視線を意識するため、ガーデニングを行っている割合が高く、自ずと庭の装置にも力が入る。その結果、個人が行うガーデニングの行為が、庭を介して住宅や地域を結ぶ居住環境の質を向上させる。

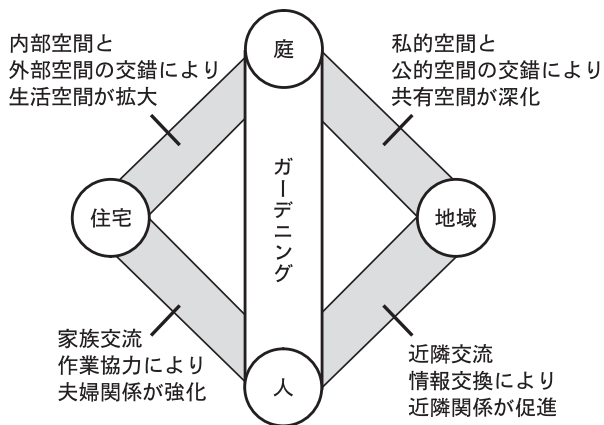


図 22 「庭およびガーデニング」の効果

④ガーデニングが、地域間、夫婦間の交流を生む契機になる。ガーデニングという共通の趣味を通して近隣交際が発展し、またガーデニング作業を通して夫婦の協力体制が築かれる。

以上のことから、別荘地におけるガーデニングは、共有空間意識の深化、生活空間の拡大を促進し、居住者の心を和ませ、近隣との親密な交流を齎し、空間・人間関係で構成される居住環境全体の質を高めることに有効であることが明らかである(図 22)。

本研究は、「別荘地から定住地に転換したシニアタウンにおける高齢者の居住環境の再編に関する研究」の一部であり、番場美恵子講師(短期大学部文化創造学科)、小森佑子助手(環境デザイン学科)をはじめ、奥山真衣、小渕翔子、田中祥子、中本百合子、前田早穂さん(いずれも竹田研究室所属の平成 21 年度生活環境学科卒業生)が調査に参加・協力された。記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 竹田喜美子: 輸入住宅に関する住居学的研究, 街並みと地域コミュニティの関係ーオープンな前庭の効果ー, 私家版, pp 119-135, 1999 年
- 2) 藤井英二郎: 見る庭と触れる庭ー日本人の緑地観ー, 淡交社, 1995 年
- 3) 星進: 住宅と庭の接点構成ー軒まわりの作庭手法ー, 誠文堂新光社, 1980 年
- 4) (財) 日本花普及センター: 設計から楽しむガーデンデザイン入門, 農山漁村文化協会, 2002 年
- 5) 株式会社創園・企画編集: 創園, 株式会社ミサワホーム総合研究所, 1998 年
- 6) 田畑貞寿・樋渡達也: 造園の辞典, 朝倉書店, 1995 年
- 7) 三井秀樹: ガーデニングの愉しみー私流庭づくりへの挑戦ー, 中央公論社, 1998 年
- 8) 中尾真理: イギリス流園芸入門, 晶文社, 1995 年

9) 進士五十八: 日本庭園の特質ー様式・空間・景観, (財) 東京農業大学出版会, 1987 年

(たけだ きみこ 環境デザイン学科)

(おおさわ なおこ 平成 21 年度生活環境学科卒業生)